慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	神秘主義としてのスポーツ： ローベルト・ムージルの長編小説『特性のない男』における近代人の葛藤
Sub Title	Sport als Mystik. : die Konflikte der Moderne in Robert Musils Roman Der Mann ohne Eigenschaften
Author	宮下, みなみ(Miyashita, Minami)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2023
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.125, (2023. 12) ,p.66 (119)- 82 (103)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	香田芳樹教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01250001-0066

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

神秘主義としてのスポーツ

ローベルト・ムージルの長編小説『特性のない男』における近代人の葛藤

宮下みなみ

1. 序

20世紀オーストリア文学を代表する作家の1人、ローベルト・ムージル（Robert Musil, 1880-1942）のライフワークとなった未完の長編小説『特性のない男（*Der Mann ohne Eigenschaften*）』（1930/1932）においては、第一次世界大戦前夜のウィーンに生きる主人公ウルリヒの視点を通じ、人間に関わる古今東西の現象についてのさまざまな考察が展開されている。1930年に出版された第1部・第2部、および1932年に出版された第3部の前半部分までですでに1000頁を超え、第3部後半部分の未決定稿を含めれば2000頁にもおよぶ規模を持つ本作は、あたかも無数の思索が積み重なって織りなされた巨大な知的迷宮といった様相を呈する。過去のムージル研究においては、自然科学・心理学・哲学・社会学・ナラティヴ論といった多岐にわたる観点から、この知的迷宮の見取り図を明らかにする試みがなされてきた。これに対し本稿は、本作のきわめて基礎的な設定自体に関わる、しかし徹底的な議論がなされてきたとは言いがたい問いを出発点とする。主人公のウルリヒは数学者でありスポーツマンでもあるという本作の独特な設定は、果たしていかなる理由で選び取られたのか――この基本的な問いに改めて立ち返り、それに対する答えを見出してゆくなかで、本稿は、ウルリヒが近代人として抱えていた葛藤の内実との関連から、本作の中核をなすコンセプトである「特性のなさ」の意味を明らかにしてゆく。その際にはまず、ムージルが執筆したスポーツに関するエッセイが大きな手掛かりとなる。小品でありながら実はムージル文学を理解するうえで重要な意味を持つこれらのスポーツ・エッセイの分析を通じ、ムージルのスポーツ観を詳細に探ってゆくことが、本稿の第一の目標

である。そしてそれに基づき、ボクシングをはじめとする身体鍛錬に励む人物として描かれるウルリヒの人物像についてさらに考察を深めてゆくことが、本稿の第二の目標となる。そのなかで、特に科学技術との関わりを軸に、ムージルが時代の考証人としてスポーツという近代の新たな現象をどのように捉え、さらには彼が想像力の領域を交えて展開する小説世界で、スポーツのなかに潜在するいかなる新たな心身の可能性を見据えていたのかについて詳らかにしてゆく。

2. 近代スポーツという文化現象

ムージル自身、フェンシング・テニス・自転車・水泳・ボートなどを趣味としてたしなむスポーツ好きであったが、[1] このような彼のスポーツへの関心は個人の次元にとどまらず、時代現象そのものでもあった。19世紀以降に発展した近代スポーツが、当時の時代の様相を多角的に反映するものであったことは、モダニズム文化研究者フライクの研究に詳しい。まず近代スポーツ成立の前提条件となったのは、近代科学技術の寄与による、競技場やスポーツ・ジムといったインフラの整備やスポーツ器具の発展・普及であった。そしてそれだけではなく、労働者の動作を科学的に分析して仕事の高能率化を目指すテイラー・システムがアメリカからヨーロッパにも広まり、労働の生産性が大幅に向上したことも、スポーツに興じる余暇時間の創出につながったという点で、スポーツの普及に貢献している。[2] これまで貴族の特権であったスポーツは、こうして科学技術の発展と足並みをそろえて一般市民にも開かれてゆくが、その背景にはさらに、個々人が健康維持に努めることが市民としての務めであるという、市民のあいだでの意識の高まりもあったとされている。[3] この意味で、スポーツは共同体に寄与すべき存在としての市民の意識と結びついているが、[4] しかしそれと同時に、スポーツの時間は、人間生活のなかの公的な労働時間とは区別される、私的な時間でもある。私的な時間のなかで個人が自己の知覚や身体感覚を研ぎ澄ますスポーツという活動は、個人主義へと傾倒してゆく時代の一潮流に連なるものであった。[5]

とはいえ見方を変えれば、スポーツは市民が効率的に気分転換をおこない、再び労働に戻るというルーティンを前提としており、この点ではむしろ労働の生産性向上に寄与する機能を担っているとも考えられる。[6] また、自らの身体を意の

ままに動かせるようにするトレーニングをおこなうことで、スポーツは身体を機械のように合理的に制御する技能の習得を目指すものともなる。[7] つまり、スポーツは身体の合理的な規律化を助成するもので、規律化された身体はいっそう効率的な労働の実現にもつながってゆくのである。まるで機械のように強力かつ正確な運動を持続的におこなうことができる〈健康な〉身体のイメージが、時代を動かす2つの要素、すなわち軍事と工業のイメージと重なり合っていることは偶然ではないだろう。[8]

このようにスポーツは、個人と共同体のあいだの油断ならない緊張関係がありありと反映された文化現象となっていた。近代人が抱える葛藤の具体的な表出であったとも言えるこの文化現象に、ムージルはいったいどのような問題や可能性を見出していたのだろうか。以下ではまず、『スポーツの眼鏡越しに（*Durch die Brille des Sports*）』（1925-1926）と『パパがテニスを習ったころ（*Als Papa Tennis lernte*）』（1931）という、ムージルが執筆した2つのスポーツ・エッセイを取り上げ、そのなかで展開されている彼のスポーツ観を浮き彫りにしてゆく。

3. 『スポーツの眼鏡越しに』

本エッセイでのムージルの主眼は、スポーツは単なる身体規律を目的としているのみならず、果たして人間の感性や精神的な領域の深奥へと踏み入ってゆく活動となりうるのか否かという点にある。これに関して彼は、スポーツには日常的な身体感覚の敷居から外れる面があるのではないかという方向へと議論を進めてゆく。たとえば、自動車という新しい技術の産物が人々に今までにないスピード感覚を体験させ、そのスピード感覚に合わせた注意力や身体能力が新たに求められたように、スポーツも、日常生活では発揮されることのない敏捷な動きや筋肉への負荷といった新たな身体の体験となり、これまでになかった特別な注意力や反射神経が要求される。この意味でムージルは、自動車もスポーツも、日常生活のなかでは体験できない速度や強度の身体感覚を人々に味わわせ、まさに人々が新たな身体感覚を開拓してゆくきっかけを提供しているのだという観点を提示する。[9] それは言い換えれば、科学技術の発展・応用と並行して、スポーツは、これまでの人間の身体感覚の枠組みを打ち破り拡大してゆく機会を生み出している

のではないかという観点である。

それと関連してムージルは、実は先立って本エッセイのなかで、スポーツにおけるこのような日常的な身体感覚からの逸脱は、ある種の神秘的な体験につながってゆく可能性もあるという持論を展開していた。その契機となるのは、アスリートが自らの身体の合理的な動きを統御しようとするだけではなく、主体的な自我と客体的な身体という主客関係の枠組みから離脱してゆくプロセスであるとされる。これに関して、ムージルは例を挙げながら以下のように説明している。

> （…）試合の数日前からはトレーニングを休む必要があるが、その理由は、意志や意図、自意識等に干渉されることなく、筋肉や神経が最後に互いにうまく折り合えるようにするためというものに他ならない。試合でのパフォーマンスの瞬間、筋肉や神経こそが自我と跳躍したり刃を交えたりするのであり、自我が筋肉や神経を統御しようとするのではない。そして、ただ少しでも強く思考の光がこの暗闇のなかに兆してしまえば、アスリートは競技から脱落してしまう。それは意識を持った人格としての自己を突き抜ける、忘我に他ならないのだ。[10]

機械的な因果論の理屈にしたがえば、練習は積み重ねるほど結果につながるはずで、身体がこなれて準備された状態で試合に臨むほうが良い結果に結びつくのではないかとも考えられるが、ムージルはこれとはまったく異なる視座に立つ。試合前は休養するという実践を裏づける説明として、ムージルはここで「筋肉と神経が最後に互いにうまく折り合えるようにする」ためという点を挙げ、その際に特に必要なのは、身体を主体的に統御する自我という、従来的な心身のヒエラルキー関係を脱することであると論じるのだった。主体であるアスリートの自我が自らの身体を制御して動かしているというよりも、むしろ自我と身体がともにスポーツという活動の主体となって互いに働きかけ合うことで、アスリートは「忘我」、言い換えれば、現にある自己から離れ新しい自己と出会う体験をする。ムージルはこの主張に基づき、一般的に「どうしてスポーツは、スコラ哲学の時代とは異なった、近代人の神秘的な要求との関連のなかに置かれないのだろうか？」とも自問する。[11]徹頭徹尾、理性を通じて神を認識することを目指してゆくスコラ哲学とは異なり、[12]理性主義を突き詰めたのちにその限界と対峙したうえで、

理性の光によってむしろかき消されているのかもしれない未知の領域を探求せよというのが、ムージルの言う ── スポーツ活動とも関わるべき ──「近代人の神秘的な要求」であった。ここでの神秘主義は、特定の時代に限られた歴史上の思想文化潮流というよりも、人間理性のあり方についての葛藤を抱えた近代人にも開かれたアクチュアルな活動として捉えられている。

以上のように、本エッセイでは人間の感性や精神的な領域の深奥へと分け入ってゆく神秘主義の具体的な実践としてスポーツというテーマが扱われているが、ムージルの他のスポーツ・エッセイを参照すれば、彼がスポーツという文化現象のまた別の面にも注目していたことが見て取れる。この点について明らかにするために、以下ではもう1つのスポーツ・エッセイ、『パパがテニスを習ったころ』について考察をおこなってゆく。

4. 『パパがテニスを習ったころ』

ムージルいわく、およそ25年前の「パパがテニスを習ったころ」とは異なり、近頃（エッセイが執筆された1930年前後）ではテニスコートが芝生からコンクリート製のハードコートに換えられつつあるが、これはテニスというスポーツの客観性や合理性に関わる問題であるとされる。というのも、芝生のときは球の動きが予想しづらく、運の良し悪しが試合の勝敗に影響していたが、ハードコートになってからは、運に関係なく、より打法や駆け引きの工夫によって勝敗が左右されるようになってきたからだ。[13] つまり、テニスの試合において、偶然的な要素ができるだけ排除され、代わりに因果関係を合理的に計算した技術や駆け引きの工夫によって勝率を上げることが可能となり、スポーツの客観性と合理性がいっそう追求されるようになったのだった。この点について、ムージルはさらに以下のように議論を進めてゆく。

> いくつかの紡績機を統御するときのように、集中力を動員し、配分することを学ぶのだ。自分自身の身体のなかで起こっているプロセス、運動を調整するときの反応時間や神経支配・増加・障がいなどを観察することも習得される。副次現象の観察や評価をすること、そしてすばやく知的に総合判断することも学び取られる。これらすべては、ジャグリングの域には達しないまで

も、それと似たような技術を求めるものだ。[14]

合理的できわめて厳密な身体の観察と分析、そして、身体を機械のごとく精密かつ強靱に作動させるためのトレーニング。ここでは、スポーツは科学技術とまさに同じ世界観を共有する面を持つという観点が明らかに示されている。また、本エッセイの導入部分ですでに「エンジン技術と人間の冷静さが結合したスポーツなど、おそらくかつては存在しなかった」[15]とも言われており、執筆時期の1930年頃には、科学技術が基盤とする合理精神が如実にスポーツの領域にも浸透し始めたことが示唆されている。この意味でスポーツという文化現象は、すでに1900年代の入り口地点から始まっていた科学技術のユートピアという時代の構想に連なるものであったと解釈することも可能であろう。折しも1909年、イタリアの詩人マリネッティ（Filippo Tommaso Marinetti, 1876- 1944）が日刊紙『ル・フィガロ（*Le Figaro*）』に「未来派宣言」を発表し、機械が持つスピード感とダイナミズムを称える新しい時代の前衛芸術の到来を告げると、シュペングラー（Oswald Spengler, 1880-1936）、プレスナー（Helmuth Plessner, 1892-1985）、ユンガー（Ernst Jünger, 1895-1998）などのドイツ語圏の思想家や作家たちのあいだでも――そこにファシズム的イデオロギーとの親和性が潜在していたことは忘れてはならないだろうが――機械と人間が共生するある種の科学技術のユートピア世界について構想されるようになっていた。[16]『特性のない男』において、かつて主人公ウルリヒが学生時代に機械工学科の教室に足を踏み入れた瞬間の、「タービン発電機のさまざまな新しい形状や蒸気機関調節装置のピストンのたわむれが目前に見られるとき、人は何のためにベルヴェデーレのアポロンを必要とするだろうか！」[17]という感慨も、やはりこのような科学技術の世界観への熱狂という時代の潮流に棹差すものであったのだろう。

とはいえムージルは本エッセイの後半部分で、スポーツは客観性や合理性のものさしでは計りえない次元にある活動でもあることを――『スポーツの眼鏡越しに』でもすでに論じられていた、スポーツのなかの忘我体験という話題とも呼応させるように――強調する。

左右どちらの足で踏み切るかについては、すでに助走の距離からあらかじめ決められているものなのだということはある種の奇蹟で、その奇蹟に関して

説明しようとするだけでもう、（説明は可能ではあろうが）くだくだしいことときわまりなくなってしまうだろう！自我の本質は、スポーツという経験のなかで肉体の暗闇から輝き出てくるものであるが、そうでなくてもまた、スポーツにおいては何か不可思議なことが光を発するようになるものなのだ。しかしまったくのところ、どれほど多くの今日のスポーツ人間たちが、こういった事柄について問い、その問いに耳を傾けたりするのかについては、ぜひ知りたいものだ。[18]

跳躍の際にどちらの足で踏み切るのかについては、たしかに助走の距離から計算して推し量ることが可能ではあろうが、実際に競技をおこなうスポーツ選手は、そういった計算をせずとも直観的にどちらの足で踏み切るべきかをあらかじめ知っている。ムージルによれば、客観的・合理的な証明を不要としてしまうほどに自明な自らの身体についての理解は、スポーツのなかで現れてくるある種の「奇蹟」のような体験であるという。このように、客観主義・合理主義の具体的な実践としてのスポーツと、ある種の神秘的な体験をもたらす可能性を持ったスポーツという、近代スポーツの2つの顔を突き合わせることが本エッセイでは試みられていたのであり、この観点はムージルのスポーツ観の核を成すものともなっている。しかしここで留意すべきは、ムージルはこれを必ずしもスポーツの二元論的な相容れない対立軸として捉えているわけではないという点である。スポーツの持つ2つの顔は、反対方向を向いているにもかかわらず同じ1つの身体で分かちがたく結びついたヤヌス神のように、ウルリヒという人物のなかで緊密に関係し合うものとなっている。以下ではその具体的な内実について、『特性のない男』の具体的なテクスト分析を通じて明らかにしてゆきたい。

5. スポーツマン・タイプの数学者ウルリヒ

機械工学も修めた数学者であり、かつスポーツマンという、ムージル自身の姿とも重なるウルリヒの人物像は、すでに彼の初登場の場面で強く印象づけられている。この場面で彼は自室の窓辺から通りを見下ろし、通りを行く人や車などの運動エネルギーを計測することで、ウィーンという街の雰囲気を数値的に表現しようと試みている。

彼は窓辺に立っており、彼の視線は庭の空気の繊細な緑のフィルターを通過して褐色の街路に向けられていたが、彼は10分ほど前から時計を手に持ち、渦を巻くような慌ただしい動きで彼の網膜を満たしている自動車や馬車、トラム、遠くから見ると洗い晒されて消えてしまったように見える歩行者の顔についての計算をおこなっていた。ウルリヒが、動いて通り過ぎゆく群衆の速度、角度、生き生きとしたエネルギーを計測していると、群衆は電光石火の速さで彼の眼を引きつけ、引きとめ、解き放ち、計測不可能なほど一瞬の短い時間のあいだに、注意力をそれらに強く向けさせ、そこから引き離し、次の対象へと飛び移らせ、それを見送るように強いた。[19]

ここでウルリヒは、街路を行き来する人間や乗り物などの対象の動きを計量観察しようと試みているわけであるが、同時に彼は自らの注意力の運動についても自己観察をおこなっている。つまり、彼は外部の対象を観察する主体であると同時に、自らの観察の対象ともなっているのだった。このような徹底した客観化の姿勢は、科学者・技術者としてのウルリヒの人物像を基礎づける特徴であると言えるだろう。

しばしこの計測の試みに没頭した後、しかし最終的にウルリヒはそれを放棄してしまう。無数のエネルギーが交錯するウィーンの街の雰囲気を総合的に数値で表現するという試みが、荒唐無稽とは言わないまでも、困難きわまるものであることは間違いない。そしてたとえそれが可能であったとしても、その数値によって、ウィーンという街や人間たちの本質が本当にわかるのだろうか――ウルリヒは結局、「少しばかり頭のなかで計算をしてから、笑いながら時計を懐にしまって、ナンセンスなことをしてしまった、と結論づけた。」[20] そして自室を出て行く途中、彼は部屋にあるボクシングボールに一発鋭く激しいパンチを食らわせる。

彼は諦念とは何かを知っている人間のように、いやそれどころかほとんど、あらゆる強い刺激を避けたがる病んだ人間のように体の向きを変えて窓辺を離れたが、隣にある控えの間を通り過ぎるときに、そこに吊るされていたパンチング・ボールの所に来て、諦念や衰弱の状態ではありえないような、き

わめて俊敏で強烈な一撃をくらわせた。[21]

ウルリヒは一見すると無気力にも見えるほどの精神的な落ち着きを保ちながら、身体的にはつねに爆発的な運動力を秘めている。このようにすでに初登場の場面において、冷静沈着とした理性と、俊敏かつ力強い身体能力とを兼ねそなえた人間として、スポーツマンであるウルリヒの人物像が造形されているのだった。

6. 神秘主義としてのスポーツ

以上のようなウルリヒの人物造形を基礎とし、『特性のない男』のなかでスポーツに関するもっとも具体的な議論が展開されるのは、第1部第13章である。この章のタイトルは「ある天才的な競走馬が、特性のない男であることについての認識を成熟させる」となっているが、この章では、天才という言葉が今までになかった使われ方をするようになったことに気づいたウルリヒが大いに精神的刺激を得たというエピソードについて、数週間前に時間をさかのぼって回想的に語られる。ここでまず興味深いのは、「天才」という語の新たな用法が「男らしさの新たなイメージ」を創出しているという、ウルリヒ独自の発想である。

> 生は新しい男らしさのイメージを求めているに違いなかった。しかしそれを求めて辺りを見回してみると、発意に富んだ頭脳が論理計算の際に応用する、要所の把握や策略は、厳格に鍛錬された身体が持つ、逃走の際に要所をおさえる技術とさほど異なったものではないことが明るみに出たのだ。(…)偉大な精神的人間と、ボクシングの全国チャンピオンを精神工学の手法で分析すれば、その専門分野における狡知・勇敢さ・反応の正確さ・コンビネーション・速度などの点において、実際おそらく同等であるとわかるだろうし、いやそれどころか、彼らに特異な成功をもたらしている長所や能力に関しては、有名な障がい物レースの競走馬と、見たところ異なるものでもないのである。[22]

天才概念は本来、ウルリヒによればとりわけ「驚嘆に値する男性的精神」と関わっており、その「男性的精神」の本質は、道義的な勇敢さを持っていること、信

念の力を持っていること、そして確かな徳を身に着けていることにあるとされていた。[23] しかし、「天才」のこのような意味合いはすでにアクチュアルではなくなっており、ギムナジウムの教師や著作集の記述のなかだけに生きている「イデオロギーの幽霊」以上のものではないという。[24] そしてそれに代わるものとして浮かび上がってくるのが、スポーツで求められる能力についての新しい認識と結びついた、「新しい男らしさのイメージ」であった。ボクシングのチャンピオンにそなわった、厳密な計算に基づく合理的な運動を大胆に遂行する能力は、実は学問の世界にも通じるものであり、今やそれこそが時代が要求する能力に他ならないという認識が社会にも浸透してゆく。そして、近代スポーツの発展にともなって新たに価値が見出されたこのような能力こそが「新しい男らしさのイメージ」を形づくり、旧来の「男らしさ」や「天才」の概念を過去に押しやろうとしているのだということを、ウルリヒは強く意識するようになる。新しい時代の人間として、旧来の徳義の修養ではなく、むしろ近代スポーツや学問の世界において追及されている合理精神をきわめてゆく必要があるのではないか —— このような考えに基づき、若き数学者ウルリヒは、鋭い理性の力で数学の新たな領域を切り拓いてゆこうとする。ウルリヒにとっての数学をはじめとする学問は、まさにこの意味で合理精神を鍛えるためのトレーニングに他ならなかった。

このようにウルリヒを支えていた強い信条は、ところが、「天才的な競走馬」という言葉との出会いによって思いがけず揺らぐことになる。ある日ウルリヒは、天才といえば芸術や学問の分野で特異な才能を発揮する人物を指すことがいまだに圧倒的に多かったものの、それだけではなく、スポーツの領域の話題でも「天才」という語が使われるようになっていることに気づく。

> すでに当時、サッカー競技場やボクシングリングにおける天才について口の端にのぼるような時代が始まっていたのだが、天才的な発明家、テノール歌手、作家といった少なくとも10人の天才が新聞紙上で取り上げられるあいだに、天才的なミッドフィルダーや偉大なるテニス競技の戦略家は多く見積もっても1人取り上げられるくらいのものだった。その新たな精神は、まだ確固としたものとしては感じられなかったのだ。しかしちょうどそのときウルリヒは、どこか先走って夏が成熟を迎えたときのような感覚とともに、突然「天才的な競走馬」という言葉を読んだのだった。それは、大反響を巻き起

こしていたある競馬の成功劇に関する記事のなかにあったのだが、それを書いた記者はおそらく、この言葉を着想したことのまったくの偉大さを少しも意識していなかったのだろう。この言葉は、社会の精神が彼の筆に乗り移って書かせたようなものだった。[25]

天才という概念がいまだに高遠な精神性と深く結びつくものとされ、スポーツ選手のパフォーマンスを天才的と表現することが稀だった時代にあって、「天才的な競走馬」という言葉はウルリヒにきわめて斬新な印象を与える。しかし同時に、「天才的な競走馬」という言葉は彼のなかにある種の戸惑いを引き起こすものとなっている。というのも、この言葉を目の当たりにしたことがきっかけとなって、ウルリヒは自らの人生方針に対して強い疑念の念を抱き始めるからだ。当初ウルリヒは、数学者として思考の鍛錬に励むことで「より重要な人間」への道が開けると、いわば素朴に信じていた。[26] しかし時代の流れのなかで、本来は洗練されたインスピレーションに満ちた精神的な人間を指して使われていたはずの天才という語は、肉体の鍛錬に励むスポーツマンと結びつけられるどころか、非精神的な存在として捉えられる動物である馬とすら結びつけられるようになっていた。ウルリヒは合理精神につらぬかれた思考の持ち主であったはずだが、ここで彼は、能力や性質についての合理的なカテゴリー分けにしたがって、芸術家や発明家と、スポーツマンや競走馬が「天才」というカテゴリーのなかでまったく同等に扱われることについて、違和感を覚えずにはいられないようだ。能力や性質と存在価値は、いったい直結されうるものなのか。こうしてウルリヒは、合理精神の徹底化だけでは解明できない存在価値の問題に突き当たり、「新しい男らしさのイメージ」と重なる合理精神の鍛練によって、数学者として「より重要な人間」になることを目指すという、自らの人生方針に対し疑念を抱き始めるのだった。そしてその結果として「結局ウルリヒは、学問の世界において、自分は目標もなく次々と山脈を踏破してゆく男と同じようなものなのだという発見に至った」。[27] 同時代の文学作品にしばしば描かれてきた、軍事技術面で実用的な貢献をもたらす、迷いや不安とは無縁な行動型人間としてのスポーツマン・タイプの技術者とは異なり、[28] ウルリヒはここでむしろ逆に、まさに自らの理性的な思考を突き詰めるがゆえに迷いを抱え、進歩史観的な成長発展の意義に対して懐疑的な存在として描かれている。この意味で、『特性のない男』は主人公の精神的な成

長譚としての教養小説めいた体裁をとりながら、成長することに絶対的な意義を見出さない主人公が描かれることで、教養小説の枠組みを内部から打ち破ってゆくものともなっているのだった。[29]

そしてこの時点で、ウルリヒは数学者としてのキャリアを放棄する。彼は、自分が無限の可能性に開かれた能力を持っているとわかっているが、それがカテゴリー化され、特定の目的のために道具化されることに対する拒絶感を募らせてゆく。

> ウルリヒは驚嘆に値する鋭さで、自分がまったく必要性を感じない金儲けの才能を除き、時代が授けるあらゆる能力や特性が自分にそなわっていることを理解したが、しかし彼にはそれらの能力や特性を実地応用する可能性が欠けていた。サッカー選手や競走馬にさえ天才性がそなわっているのならば、個性を救い出すために残された手段は、その天才性をいかに用いるかという点にかかっているのだと考えて、ウルリヒは以下のように決心した。自分の能力の適切な応用方法を模索するべく、1年間の人生の休暇期間を設けよう、と。[30]

こうして、特性というカテゴリーによって分類されることを拒み、実用性という目的に縛られることなく、自分のなかの可能性を探求し続ける人間である「特性のない男」としてのウルリヒが誕生することになるのだった。

以上のように「特性のない男」としての自己認識に目覚めた後も、ウルリヒがなお身体を鍛え続けるのは、客観精神や合理精神を徹底的に追求し続けたその先にこそ浮かび上がってくる、自らの理性のあり方や存在そのものに対する問いと向き合うためだったのだろう。彼にとってのスポーツは、身体能力の維持向上という目的に縛られたものではなく、身体鍛錬によって自らのなかに潜在する新たな能力を引き出すための実験となっているのだった。第1部第7章においてウルリヒは、ある夜暴漢に襲われた際、日頃のトレーニングにもかかわらず、あっさり打ちのめされてしまい負傷して気絶しかけたところを、通りがかりの女性に助けられる。ウルリヒの身体鍛錬が実際の格闘に勝つという実用性につながってはいないことが、このエピソードからよく見て取れるとも言えるだろう。その女性は、この出会いがきっかけとなって後に彼の愛人となるボナデアである。事件の

後、ウルリヒはボナデアに向かって、自らの失態について滔々と弁解を述べ立てる。

> むろんウルリヒは、この出来事についての弁護を生き生きと述べ立てはじめ、傍らで驚いたような表情を浮かべた母性的な美しい女性に対してこう説明した。このような格闘経験については、その結果いかんで判断評価をおこなってはならないのです、と。このような格闘の本当の魅力は、きわめて短時間のあいだに、普段の市民生活では起こりえないような敏捷さと、ほとんど知覚不可能なほどかすかな兆候に導かれて、きわめて多くの、多様な、エネルギーに満ちた、それでいて非常に厳密な、互いに連合された動きを完遂しなければならない、という点にあります。その動きを意識によって統御することは不可能です。逆に、スポーツマンなら誰でも知っているように、試合の数日前からはトレーニングを休む必要があるのですが、その理由は、意志や意図、自意識等がともなって干渉したりすることなく、筋肉や神経が最後に互いにうまく折り合えるようにするためというものに他ならないのです。したがって試合でのパフォーマンスの瞬間は、つねに以下のようなものになります、とウルリヒは描写を続けた。筋肉や神経こそが自我と跳躍したり刃を交えたりするのです。（…）不幸なことに、ただ少しでも思考の光がこの暗闇のなかに兆してしまえば、その試みは例外なしに失敗に終わってしまいます。[31]

一目して明らかなように、ここでのウルリヒの弁解は、先に挙げたスポーツ・エッセイ『スポーツの眼鏡越しに』において展開されていた議論とほとんど一致している（本稿第3節を参照）。ウルリヒはボナデアに対するこの弁解のなかで、スポーツは「意識的な人格のほぼ完全な陶酔あるいは超越」であるとも述べ、さらにスポーツは「現代の神学」であるという挑発的な考えに到る。[32] 相手に勝つという実用性のみに価値を見出すことに抵抗を感じずにはいられないウルリヒの態度や、神秘性さえともなう自己超越体験としてのスポーツの新たな面への強い関心は――格闘で敗れた彼の言い訳とも聞こえる皮肉めいた調子がともなっているとはいえ――いかにも「特性のない男」らしい。このような神秘主義としてのスポーツというウルリヒの観点は、まさに自らの理性志向を徹底的に突き詰めた

先にこそ現れてくる次元にあったのだと言える。

7. 結語

以上論じてきたように、近代スポーツは科学技術の発展による設備・器具や余暇時間の創出を前提として成立し、さらには科学技術が基盤とする合理精神を受け継ぐ活動である一方、スポーツへの没頭が自我を超え出る体験となり、自我を新たに捉え直すとともに、身体と精神の今までにない関係性を切り拓く可能性にもつながりうることが、ムージルの思想や作品においては論じられていた。スポーツと神秘主義のこのような結びつきが生み出すのは、たとえば先行研究で言われているような、自己疎外につながりかねない合理主義に対置される、個人としての自己存在をインテンシヴに感じる体験や、[33]「自由な人格の自己表出可能性」[34]というよりも、むしろ、意識を持った人格としての自己を突き破ってゆく自己解体体験、すなわち忘我体験であると言うべきだろう。スポーツは神秘的な忘我体験と結びつくことで、認識する主体と認識される客体という、西欧近代的な二元論それ自体に対する批判を内包することになる。ここでスポーツは、近代科学精神の申し子でありながら、それに対して鋭い批判意識をも向け続ける活動として捉えられるのだった。本稿ではこのようなムージルのスポーツ観を確認したうえで、それが『特性のない男』内でも主人公ウルリヒの人物造形のなかに引き継がれていることを明らかにしてきた。2つのスポーツ・エッセイで論じられていた、スポーツと学問は身体運動や思考判断の厳密性の追求という点で結びつくという視点、および自己解体体験としてのスポーツという発想をウルリヒも明らかに共有しており、それは彼が自らの「特性のなさ」という、小説の中心的コンセプトともなる発想に至る際の重要な契機となっているのだった。

注

1 Vgl. Fleig, Anne: Körperkultur und Moderne. Robert Musils Ästhetik des Sportes. Berlin (de Gruyter) 2008, S. 27; Corino, Karl: Robert Musil. Eine Biographie. Reinbek (Rowohlt) 2003, S. 809; Pfohlmann, Oliver: Robert Musil. Reinbek (Rowohlt) 2012, S. 34.

2 Vgl. Fleig, a.a.O., S. 80. たしかにテイラー・システムの導入によって生産効率は向上したが、さらなる効率化の要求がとどまることはなく、機械的に仕事のノルマを達成することをつねに課せられた市民の労働負担が実際軽くなったとは言い切れないことにも留意すべきであろう。テイラー・システムにおいて実践されていた、科学的分析に基づく徹底した分業体制の内実、およびテイラー・システムのドイツをはじめとするヨーロッパへの広まりの過程に関しては、以下も参照。Vgl. ebd., S. 53-63.

3 Vgl. ebd., S. 29-37.

4 特に集団でおこなうスポーツは、大衆としての市民の身体能力を引き上げるだけでなく、そこに共同体の連帯意識を生み出す効果も持ち、特にオリンピックは国力を誇示する政治的プロパガンダの手段となった。影山健・中村敏男・川口智之・成田十次郎『スポーツナショナリズム』大修館（1978年）88-116頁参照。なお、ナチスのプロパガンダとして機能していたベルリン・オリンピックに対しては、実際すでに当時からイギリスをはじめとする他国で批判が巻き起こっていた。その詳細な内実については以下を参照。青沼裕之『ベルリン・オリンピック反対運動：フィリップ・ノエル＝ベーカーの闘いをたどる』青弓社（2020）。

5 Vgl. ebd., S. 29.

6 Vgl. ebd., S. 79.

7 Vgl. ebd., S. 14f.

8 Vgl. ebd., S. 44-47.

9 Musil, Robert: Gesammelte Werke in 9 Bänden. Bd. 7, hrsg. von Adolf Frisé, Reinbek (Rowohlt) 1978, S. 793. 以下、同書はGWと略記し、引用・参照の際には巻数および頁数を併記する。

10 Ebd.

11 Ebd.

12 スコラ哲学においては、論理的推論や概念的区別を中心とした問答形式で議論を重ねることで、キリスト教的な神を学問的に論理づけることが目指される。Vgl. Schmidt, Heinrich; Gessmann, Martin: Philosophisches Wörterbuch. Vollständig neu bearbeitete Auflage, Bd. 23, Stuttgart (Alfred Kröner) 2009, S. 647f. また、スコラ哲学を「教会公認の教義を合理化し擁護する哲学」とみなすことも可能で、一般的に「スコラ的」という表現は、単に言葉の理屈だけの議論に対して使われる。森宏一編『哲学辞典』青木書店（2000）243頁参照。ムージルは中世ドイツの神秘思想家マイスター・エックハルト（Meister Eckhart, ca.1260-ca.1328）の著作を熟読していたが、エックハルトもスコラ哲学者として出発しながら、感覚的な忘我を通じて神を直観する神秘主義に至ることで、理性主義のスコラ哲学を超えようとした。ムージルの思考には、このようなエックハルトの姿が前提としてあったことも推測される。

13 GW 7, S. 686.

14 Ebd., S. 689.

15 Ebd., S. 687.

16 ベルント・シュティーグラー〔柳橋大輔（訳）〕『機械の陶酔のなかで』〔鍛冶哲郎・竹峰義和（編）『陶酔とテクノロジーの美学 ドイツ文化の諸相1900-1933』青弓社（2014）22-45頁〕参照。

17 GW 1, S. 37.

18 GW 7, S. 690.

19 GW 1, S. 12.

20 Ebd.

21 Ebd., S. 13.

22 Ebd., S. 45.

23 Ebd., S. 44f.

24 天才概念については、ドイツ語圏では特に18世紀以降盛んに議論されるようになっていた。この概念は主に美学の領域で大きな意味を持つようになり、たとえばカント（Immanuel Kant, 1724-1804）によると、天才は天賦の才能としての芸術的創造力およびその能力を持っている人のことを指す。しかしニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900）は、天才は天賦の才能というよりも、人間のいくつかの根本的な衝動が協同的に作用する力であると説明し、天から与えられるインスピレーションという天才にまつわる神秘性をはぎとった。Vgl. Schmidt, Heinrich; Gessmann, Martin, a.a.O., S. 255.『特性のない男』のこの箇所で述べられている、天才がインスピレーションに富んだ芸術的人物だけではなく鍛えられた精神や肉体の力を持つ人物をも指すようになったという趨勢は、ニーチェの思想と同じ方向性を持っているとも言えるだろう。

25 GW 1, S. 44.

26 ウルリヒは「重要な人間になるという意志によって内的に満たされていなかった自分の人生の時期など、思い出せなかった」ほど、若い頃から「重要な人間になる」という強い意志とともに人生を歩んでいた。GW 1, S. 35. 彼は当初、軍人やエンジニアといったキャリアを選んだものの、やがて数学をきわめることでこそ「重要な人間になる」という目標に到達できると考えるようになる。Vgl., ebd., S. 35-41.

27 Ebd., S. 46.

28 識名章喜：英雄としての技術者：Reinhold Eichackerの科学技術小説『黄金をめぐる闘争』を読む［『ドイツ文学』第94号、1995年、43-52頁］47-48頁参照。

29 『特性のない男』よりやや早く世に出たトーマス・マン（Thomas Mann, 1875-1955）の『魔の山（*Der Zauberberg*）』（1924）は、技術者を主人公とした、基本的には教養小説の伝統にのっとった作品であると言える。ムージルはマンを好敵手としてみなしていた傾向があることも視野に入れ、『特性のない男』を、いわば正統派の小説家であるマンの教養小説に対抗するような反教養小説として捉えることも可能で

あろう。Vgl. Fleig, a.a.O., S. 245.

30 GW 1, S. 47.

31 Ebd., S. 28f.

32 Ebd., S. 29.

33 Vgl. Bauer, Uwe: Sport und subjektive Bewegungserfahrung bei Musil. In: Uwe Bauer; Elisabeth Castex (Hrsg.): Robert Musil. Untersuchungen. Königstein i.T. (Athenäum) 1980, S. 99-112.

34 Fleig, a.a.O., S. 13.